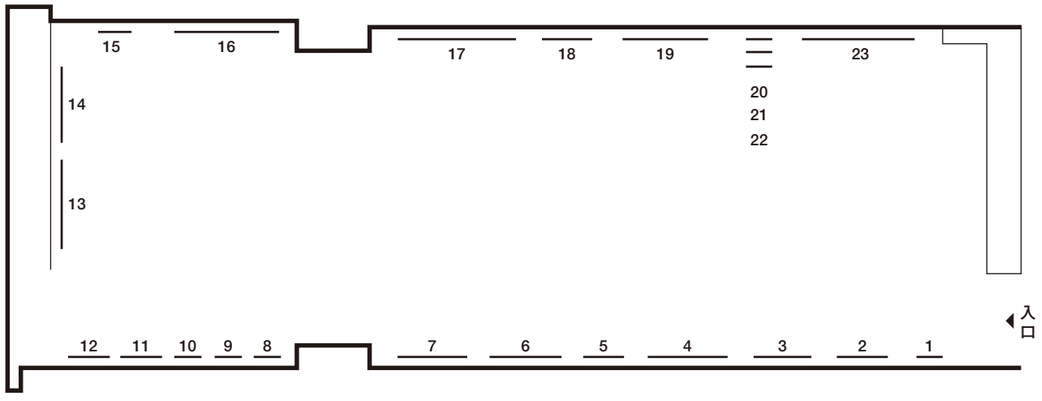

LIST OF WORKS

山村國晶

1 《Work1965》／1965／油彩、キャンバス／530×450mm
2 《Work69-1》／1969／ミクストメディア、紙／750×1000mm
3 《Work69-2》／1969／墨、紙／1050×760mm
4 《Work79-4》／1979／油彩、キャンバス／1300×1300mm
5 《Work1981》／1981／油彩、キャンバス／1300×810mm
6 《Work88》／1988／油彩、キャンバス／1300×1300mm
7 《Work2016-12》／2016／油彩、キャンバス／1120×1455mm

加藤松雄

8 《レリーフ 79-11》／1979／ラッカー、釘、ベニヤ／475×375mm
9 《レリーフ 79-10》／1979／ラッカー、釘、ベニヤ／390×540mm
10 《レリーフ 79-05》／1979／ラッカー、釘、ベニヤ／395×545mm
11 《Division 87-9-7-2》／1987／シルクスクリーン、ステンレス板／860×645mm
12 《Division 87-7-2-7》／1987／シルクスクリーン、ステンレス板／860×645mm
13 《磁場に向けて 96b》／1996／油彩、ステープル、木製パネルにキャンバス／1200×1200mm
14 《磁場に向けて 16-21》／2016／油彩、ステープル、木製パネルにキャンバス／1945×1305mm
15 《秋色すすむ》／2014／油彩、キャンバス／432×610mm
16 《磁場に向けて 16-23》／2016／油彩、ステープル、木製パネルにキャンバス／1200×1945mm

原 健

17 《CROSS WORK》／1967／油彩、キャンバス／1815×1815mm
18 《CROSS GRADUATION》／1969／油彩、キャンバス／1220×1000mm
19 《STROKES 92-5》／1992／油性木版、溜漉紙／1500×2000mm
20 《飛華 ASUKA 0112》／2001／油彩、キャンバス／530×650mm
21 《飛華 ASUKA 0110》／2001／油彩、キャンバス／530×650mm
22 《飛華 ASUKA 0123》／2001／油彩、キャンバス／530×650mm
23 《望潮 SHIOMANEKI 0710》／2007／油彩、キャンバス／2280×1820mm

加藤松雄
原 健
山村國晶

2017.1.28 Sat. - 3.25 Sat.

企画 佐藤克久
Minatomachi Art Table, Nagoya
［MAT, Nagoya］
主催 港まちづくり協議会
協力 K.Art Studio、SHUMOKU GALLERY、
MISAKO & ROSEN、増田千恵

MAT Exhibition vol.5

絵画の何か

Part2

SOMETHING OF PAINTING

Part 2

Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F : Exhibition Spaceでは、昨年度2015年に「絵画の何か」と題した展覧会／トークシリーズを開催し、大きな反響がありました。愛知はこれまで数多くの優れた画家を生み出してきた地域であり、多くの来場者とともに「絵画の何か」について考える有効な機会となりましたが、「絵画の何か」についての明確な「何か」が答えとして見出されるわけではなく、この「問い」はこれからもなお続きます。
今年度も引き続き、展覧会／トークシリーズを行う企画の第２弾として「絵画の何か Part2」を開催します。
この地域で制作活動を続けるアーティストの１人であり、本展企画者である佐藤克久は、絵画における「危機感」やその「広がり」について、前回若手のアーティストたちと共に考えた「問い」を、今回はこの地域で活動を続ける1930年代・40年代生まれのアーティストに投げかけます。活動期間が長く今もなお変化・更新し続ける彼らの「経験」や「言葉」を共有することで、絵画を多角的に捉え、「絵画の何か」について思考し、これからの絵画への可能性を探ります。またトークシリーズ「絵画の夕べ」では、この地域に関わりのあるアーティストや美術館学芸員とともに、それぞれの視点から絵画について読み解き、再考する場をひらきます。

絵画の何か Part2

MAT Exhibition vol.5

EXHIBITION

「絵画の何か」「絵画の夕べ」は展覧会／トークシリーズを通じて多くの経験と言葉を共有し、未だ見ぬ絵画を目指す企画です。私が課題にしている危機感（閉塞感）を掘り下げてみると、完全な自立性と普遍性を持ちえないはずの個人が、作品では自立性と普遍性を確立しなければならない、という矛盾と限界に気が付きます。また、制作者が意識的／無意識的に受ける情報が均一化していることにより、交換可能な内容や技術による作品の平均化が起きていると思うのです。「絵画の何か Part1」では「何か＝次元」と仮定し形式を超えた表現に並行して取り組む作家達に展示を依頼しました。会期中、ある作品の構造自体が変化することで、作者と作品、自立性と普遍性のどれかに偏ることなく、常に生成し続けるものとして矛盾を超える契機になったと感じています。「絵画の何か Part2」は「何か＝ニュー・オールド・マスター」と仮定し、後者の危機感について考えます。オールドマスターとは私たちがしばしば参照する「巨匠」を示す言葉です。ニュー・オールド・マスターとはその言葉を進行形として更新した造語です。同時代に生きる画家の先達として加藤松雄、原健、山村國晶の作品を展示します。近年彼らの作品に接し、新鮮な驚きと共感を覚えるとともに、自分の不勉強を反省しました。現在も進化し続ける彼らの作品は、私には開かれた世界に見えます。様々な影響に揺れながら、振れ幅をつくり柔軟性を選ぶのか、唯一性にむかうのか……永く制作を続けるサイクルの中で、出発点として「影響」を受けた物事を発酵させ作品に昇華した場合、そこからは何が見えてくるのでしょうか。

—— 佐藤克久

TALKING ABOUT PAINTING

トークシリーズ

絵画の夕べ

同時代を生きる人びとととともに、絵画について対話するトークイベント。アーティストや美術館学芸員をゲストに迎えます。

会場／Minatomachi POTLUCK BUILDING　参加／無料（予約不要）

2月18日（土） 18:00–20:00

「忘却／応用編」

絵画を出発点とした多様な表現について話します。

小林耕平（アーティスト）×
鷲尾友公（アーティスト）×
千葉真智子（豊田市美術館学芸員）
［聞き手］**佐藤克久**（美術家／本展企画者）

2月24日（金） 19:00-21:00

「危機／不定形」

美術の問題と新しい絵画について話します。

有馬かおる（アーティスト）×
梅津庸一（アーティスト、パープルーム主宰）×
佐藤克久

3月11日（土） 14:00-16:00

「ニュー・オールド・マスター／未来」

これまでの活動とこれからの未来について話します。

本展出展アーティスト（加藤松雄、原 健、山村國晶）×
木本文平（碧南市藤井達吉現代美術館館長）
［聞き手］**佐藤克久**

加藤松雄

Matsuo Kato

絵画に内在するもの

第二次世界大戦終了までと戦後にかけて、ヨーロッパ現代美術は、ダダ、シュールレアリズム、ドイツ表現主義等が総合されて世界芸術の領域に波及した。当時それはアンフォルメル（抽象表現主義）と呼ばれた。現代芸術は理念というより、絵画表面が激しく訴えかけ問いかける運動感覚であった。そこにはどこまでも抽象性が根深く内在し、個々の表現者に強い暗示を与えた。そこでは感覚器官を経て精神性に向かった。ポップアートは、その後アメリカ発の新しい分野である。私が画家を自覚し、名古屋で野外個展を催したのは1972年、37歳の時である。半具象的といった諸形態によるレリーフ作品を中心に発表したが、やはり感覚を通してやがて精神性へ方向ずける運動感に強く魅かれ、どこまで迫れるかが命題であった。81才、今日までの44年間に画題は《L字方式》《ディヴィジオン》《磁場に向けて…》等に変遷した。磁場については資料によると「磁石や電流のまわりに存在する力の場」とある。

1935年愛知県生まれ。同地在住。
画面一面に長方形が無数に配置された抽象画シリーズ《磁場に受けて》を多数制作している。曼荼羅や量子力学などの主題を取り入れた絵画制作を進める傍ら、近年では、自然の様態を「みるために描く」写生作品も制作。近年の展覧会に「相補する抽象と自然」（東桜会館、愛知、2014年）、「加藤松雄 展」（ウエストベスギャラリーコヅカ、愛知、2008年）などがある。　katomatsuo.art758.com

原 健

Takeshi Hara

それまで、形態の並列や、繰り返しによる無焦点の《ノーフォーカス》や《クロスワーク》、そして形状や色彩による暫時的移行をとらえた《グラデュエーション》シリーズを制作していた。1974年から始まる《STROKES》では、「腕のひとふり」や「筆勢」、「鼓動」など身体的な身振りや心音を意識し描く行為に思いをはせている。偶然にローラーボカシの手法を発見したのは1968年であった。網点の分解や吹き付けによるのではなく、インクの顔料そのものが相互浸透するローラーボカシの階調表現に魅了されリトグラフでの制作を展開してきた。油彩シリーズ《飛華 ASUKA》等も飛翔をイメージして生命や心音を意識し描く世界は変わらない。

1942年愛知県生まれ。山梨県在住。
腕の一振りや鼓動など、身体性を意識し描いた色彩豊かな作品を制作。リトグラフによる《ストロークス》シリーズや、近年では、油彩による《飛華 ASUKA》シリーズを制作している。近年の展覧会に「STROKES—Takeshi HARA」（チェンマイ大学アートギャラリー、タイ、2015年）、『原健×末永史尚「ホバリング」』（See Saw gallery、愛知、2014年）などがある。　www.takeshihara.com

山村國晶

Kuniaki Yamamura

学生時代に池田満寿夫氏のアトリエに出入りし多くの優れた才能ある人々との邂逅がその後の私の人生に多大な影響を与えてきました。またネオ・ダダイズム、ハイレッド・センターといった戦後日本の美術史上もっとも熱い芸術運動を間近に見て、ジョージ・マチューナスーが提唱したフルクサス等の前衛芸術に驚きと感動をもって接してきました。やがて「反美学」という言葉に強く心惹かれていき、ジャスパー・ジョンズ、ロバート・ラウシェンバーク、ジョン・ケージらが来日することを知れば何がなんでも会いにいきました。それ以後一貫して現代美術の文脈の中で制作しミニマルアート、ポストペインタリー・アブストラクションの潮流。国際化に於ける日本人としての世界観。平面としての絵画の可能性の追求。それは単純な形の自律性が画面いっぱいに増殖し「純粋に造形的一点に収斂されていく」ことを求めようとするものです。

1942年愛知県生まれ。同地在住。
1960年代東京で起こった美術運動や欧米のアーティストに触発され、抽象絵画に傾倒する。名古屋に戻った1970年頃より、東洋的な色彩を用いて、単一のモチーフを日々塗り重ねる作品を制作。近年の展覧会に「山村國晶−WORK1965-2016−」（SHUMOKU GALLERY、愛知、2016年）、「アイチのチカラ！戦後愛知のアート、70年の歩み」（愛知県美術館、2013年）などがある。